

島に新しい風が吹く ～西表島エコツーリズム協会ができるまで～

平成8年5月14日、準備会発足から2年たってようやく西表島エコツーリズム協会が正式にスタートした。島民の協力によって、西表島をエコツーリズムの島にするべく、島内観光のルールづくりと、島民自身が島をよく知るための学習活動、島外から観光客をつれて訪れる旅行会社に対して西表島観光のルールを伝えていく普及啓発、等を活動目的とする組織である。

「エコツーリズム」という言葉は、ここ数年でよく聞くようになったが、これまで国内では、地域ぐるみでこれを実践している地域はあまりみられなかった。協会を作って地域観光のあり方を島民自らが模索している西表島は、全国に先駆けた試みを行っているといつてよいだろう。

しかし西表島でエコツーリズムが行われるようになるまでの道のりは、昨日や今日始まったものではなく、そのきっかけは、沖縄の日本への返還後からのシマおこし運動にさかのぼる。

本日、「西表島エコツーリズム協会」の設立総会を迎えたのを機に、協会設立までの経緯を記録するためこの資料を作成する。

1. 沖縄返還 西表島の将来を探る(1975年～)

沖縄が変換される直前の1972年4月、一人の島の若者が西表島に帰ってきた。古見と並んで西表島で最も古い集落・祖納で生まれた石垣金星である。石垣は中学の時に島を出て中学・高校を沖縄島で過ごし、日本国へのパスポートを手に入れた東京の大学に「留学」して体育を学び、沖縄島で中学の教員をしていた。そんな彼が島に帰る決心をしたのは、情報不足の島々で、復帰を巡って島民の間に極度に社会不安が高まり、そのドサクサに紛れて土地ブローカーが暗躍して本土資本による土地買い占めが横行していた現状を見、そのすさまじさに危機感を感じたからであった。

ちょうどそのころ、島へ戻った青年らが中心となって、自らの力で島の未来を切り開く「シマおこし運動」を展開していた。青年らの運動の良き理解者で、当時西表診療所医師であった下田正夫医師は、状況の折り、(財)沖縄協会の当時の専務理事であった故・吉田嗣延に「シマおこし運動」のことを伝え、それがきっかけとなり、吉田の肝いりで(財)沖縄協会が「シマおこし運動」を支援していくこととなったのである。

そして、1979年12月に第1回沖縄シマおこし交流会議(主催・沖縄協会)が祖納公民館と西表小中学校体育館を会場として開催され、全国各地でユニークな地域づくりに取り組んでいる人々や70名近くが集まった。北海道池田町、大分湯布院の中谷健太郎氏、宮城県綾町で工芸村運動をしている黒木進氏ら様々な人々が集まり、西表島の未来について語りあったのである。

ちなみにこの会議の中心的役割を担ったのは玉野井芳郎氏(当時沖縄国際大学教授で地域主義の提唱者)、清成忠夫氏(当時法政大学教授)、事務局を担ったのが岡崎昌夫氏(当時地域科学研究所職員)であった。吉田嗣延氏は「自分たちは今日来ているんな種を撒き、明日に帰ってしまう人。いい種を育て、シマを作っていくのは青年達です」と激励され、玉野井芳郎氏は、「ふるさととは近くにありて創るものとせよ」と激励された。「シマおこし交流会議」は第3回まで西表島で開催され、その後全国各地に発信すべく、沖縄各地域において開催されるようになった。

時期を同じくする1979年、東京でも、西表島をよく知る人たちが集まって「西表島研究会」なる会が結成され、集まりがもたれるようになっていた。このときの中心人物は、現在文化庁の記念物課の調査官である花井正光、山本剛瑛(当時環境庁西表国立公園事務所職員)、現在(財)自然環境研究センターの常

務理事である山瀬一裕（当時は（財）余暇開発センター研究員）、（財）自然環境研究センターの理事の真板昭夫（当時は（財）政策科学研究所主任研究員）らである。日本の最南端に位置する八重山諸島の一つとして、西表島は文化人類学や生物学等、多分野にわたる研究者をひきつけてきたが、彼らもそんな人々である。とくに花井は、かつて京都大学の大学院生時代に西表島でリュウキュウイノシシの研究を行っており、島では石垣金星と同じ屋根の下に寝泊まりしていた仲である。石垣が抱く危機感を共有した花井が、仲間に呼びかけて始まったのがこの研究会である（余談であるが、リュウキュウイノシシの研究を通じて半島民となっていた花井は、島民の生活の糧であるリュウキュウイノシシを狩猟対象としつつも、数を維持していく方法について島民とともに研究した）。また、在東京ではないが、同じ思いを抱いていた研究者に、現在山口女子大学で文化人類学を教えている安溪遊地がいた。安溪は文化人類学者として西表島をフィールドにし、島で廃村になってしまった集落の旧住民をたずねてはヒアリングをして、当時の話を掘り起こし、「人と自然の関わり」について聞き書きをまとめ、地名地図を作成していた。山瀬・真板はそれぞれ動物、植物の研究者として、西表島と関わってきた連中である。

研究会の中心テーマは西表島を何とかしよう、ということであった。西表中毒、という言葉があるらしいが、まさしく西表中毒患者であった彼らは、「本土並」をめざす開発によって環境破壊の危機にさらされながら、核になる産業がないために無気力になっている島の現状を憂い、彼らができることは何なのかを探っていたのである。

時は上記の「シマおこし交流会議」第3回会議の頃と重なり、石垣は石垣で具体的なシマおこしのプログラムを創ることに乗りだし、花井、真板に相談を持ちかけた。島のニーズと島外の動きが一致し、島のうちと外が協力体制を組み、現在の島の問題点の分析と将来におけたシマおこしの方向性を探るべく、社会調査を行うことにしたのである。1980年、いまから16年ほど前のことであった。

真板の計らいによって、西表島とシマおこし会議のイメージをつかむため、地域振興のコンサルタントであるアルファ計画研究所長の前田宏が「第3回シマおこし交流会議」に参加した。その後（財）政策科学研究所が資金を出し、真板と前田とが、のべ半年をかけ、島の主だった人たちを対象にヒアリングを行い、石垣金星をはじめとする島民と協議しながら、調査・分析の結果を一枚のチャートにまとめていった。

この調査の結論として導き出された、西表島が今後とるべきシマおこしの戦略は、「島の自然資源を守りながら外から人を呼ぶ、環境保全型の観光の開発を行うこと」であった。まさに、これからエコツーリズム協会が進めようとしている活動の方向性が、すでにこの時から提唱されていたといえよう。

2. 資源調査始まる（1990年～）

さて、社会調査の結果が出てしばらくの間、島と東京それぞれで模索期間が続く。島では、石垣金星と夫人で染織家の石垣昭子らが中心となって工芸村運動を始め、島に新しい伝統文化産業を起こそうと試行錯誤をする（この運動はやがて浦内にある昭子の工房「紅露工房」を生む）。東京では、西表島研究会が勉強会を継続し石垣らを招いては話を聞く等、活動を行っていた。しかし、起爆剤となるものがなく、飛躍の機会を得られないまま個々人がそれぞれに島とのつながりを保つことにとどまっていた。

しかしチャンスは訪れるものである。社会調査から9年が過ぎた1989年、環境庁が、国立公園の利用者の増加と自然とのふれあいの促進を図るため、「自然体験活動推進方策検討調査」事業を開始し、3年にわたって奥日光、八丈島、そして西表島をケーススタディの対象地に選定し、新たな国立公園の利用方策の提案を求めた。最終年度である3年目の1991年度には、ケーススタディ調査および3カ年の総括を行うことになり、環境庁は西表島をエコツーリズム展開のケーススタディ地域として調査を進めることにしたのである。

この3年目の事業の委託を受けたのが、この頃には山瀬が常務理事、真板が理事を務めていた(財)自然環境研究センターである。同財団では、この事業を西表島におけるエコツーリズム資源調査として位置づけた。おわかりいただけることと思うが、西表島研究会の社会調査から11年を経てようやく、具体的な事業として西表島の環境保全型観光の整備が始動したのである。そして今日の「西表島エコツーリズム協会」の発足の直接的なきっかけとなったのは、この事業であった。というのは、石垣たちと現在の協会のコア・メンバー、島外のメンバーとがエコツーリズムをテーマに語り合う機会を作ったのがこの調査だからである。

資源調査のメンバーは(財)自然環境研究センターの真板昭夫、国友妙子と(株)地球工作所の山下広記、宮下徳子、徳吉英一郎、そして現在(有)資源デザイン研究所代表の海津ゆりえの総勢6名。この調査は西表島における最初のエコツーリズム資源調査であるが、ユニークな手法で行われた調査なので、ここにその手法を紹介する。

(1) ヒアリングプレ作業

○第一ステップ:人材リスト作り

「西表島研究所」のメンバーを通じ、まず、人材リストづくりを行った。西表島において様々な職種に携わっている人々や自然と人との関わりについて詳しい人、島の歴史をよく知る人、研究者等、老若男女併せて200人近い人々のリストができあがった。このリスト作成の作業を担当したのは、当時は九州大学博士課程に在籍し、1994年4月から環境庁職員となった、イリオモテヤマネコ研究者の阪口法明と、「西表島自然史研究会」代表で、現在エコツーリズム協会の事務局長である伊谷玄、そして先の花井であった。

○第二ステップ:調査グループのスタディワーク

西表島について予備知識を得るために、入手可能な資料をもとに事前にスタディを行い、西表島についての基礎知識を培うとともに、島でのヒアリングのポイントを絞った。その結果、1. 自然、2. 歴史・文化、3. 生活文化、4. 信仰、5. 子供の遊び、に分けて調査を行うことにした。

○第三ステップ:ベース地図の完成

資源調査のアウトプットとして資源分布図を作ることを決定し、ヒアリングの際に1:25000地図を持参し、話を聞きながら、これに資源を落としていくことにした。

このヒアリング調査のために使用したベース地図は、1:25000地形図上に地名を落とした地名地図である。先に述べた安溪遊地と、当時長崎大学大学院に在籍していた山口景子の協力を得、未だ研究途上であった西表島の詳細な地名分布図を借用し、これを地形図上に落としたのである。この地図はヒアリングの現場で実に多大な成果を上げた。島民の多く(特に高齢者)は、非常に微細な地形と地名で地理を把握しているからである。

(2) ヒアリング調査

以上の準備を終えた後の1992年1月、プレ調査に入った。この時はのべ5日間の滞在で、環境庁1名、自然環境研究センターから2名、地球工作所から2名の調査員が、石垣金星、山下謙二(漁業、ガイド。星立在住)池田昌子(民宿池田屋主人)ら、今後キーパーソンとなると思われる人々と会い、ベースマップを用いて資源の聞き取りを行った。その後引き続き、地球工作所を中心

に本調査を行い、のべ 20 日間にわたり 40 人を対象に聞き取りを行ったのである。ヒアリング作業に投入した人員は延べ 180 人に上る。

その結果を東京に持ち帰ってからテーマ別の地図に編集し、コード番号をつけてリストを作成し、地図とリストの対照で資源分布がわかるようにした。

(3) 島民を通じた調査

調査員による調査と並行して、彼らキーパーソンとなる人々を通じたヒアリング調査と、小学校の先生を通じた子供の遊び場調査を依頼した。小学校の先生には、子供たちが遊ぶ場所と、親子が遊ぶ場所を地図に落としてもらい、島民を通じた調査では、調査員が行ったヒアリングと同内容の調査を依頼したのである。

(4) その他の調査

ヒアリングによる調査以外に、次の調査を行った。

○文献調査：聞き取りでは拾えなかった情報を抽出し、マップに落とした。

○動植物リスト：過去に行われた調査結果から、現在西表島に生息する動植物のリストを作成

○西表島の概要のとりまとめ：文献調査とヒアリングから、西表島の人と自然のふれあいに関する概要をまとめた

○フェノロジーガイドの作成：ヒアリングを行いながら、西表島の一年間の動植物と人の暮らしの流れについてメモ書きしておき、これを時系列で見ることができるカレンダーのようなものに加えた。フェノロジーとは生物暦のことであるが、西表島のフェノロジーには、これに人々の暮らしの暦や行事暦を追加し、いつ・どこに・何が生息しているのかがわかるだけでなく、西表島において人々と生物がどのように呼応しながら 1 年という時の流れを送っているのかを示すものとした。

(5) アウトプットのまとめ

以上の調査をもとに、「沖縄におけるエコ・ツーリズム等の観光利用推進方策検討調査報告書」をまとめ、1992 年 3 月に完成した。構成は次の通りである。

<目次>

第一章 エコツーリズムとは

第二章 沖縄県の自然・社会特性

第三章 モデル地域の設定

第四章 西表島におけるフィージビリティ・スタディ

1) 文献リスト

2) 西表島産野生生物目録

3) 人材リスト

4) ヒアリング及びアンケート調査の整理

5) エコツーリズムの展開における調査のまとめ

第五章 西表島におけるエコツーリズム展開方策

1) 西表島エコツーリズムの方向性

2) 西表島エコツーリズムの活動の組み立て

3) 実現方策(組織化・人材育成・拠点施設)

4) 地域への波及効果

5) 今後の課題

(土地利用計画・入り込み誘導と自然保護の啓発・規制とルールづくり・
継続的な調査計画・地域社会への影響)

これに資料編として、動物リスト、資源智リスト、人材リスト、フェノロジーガイド(生物季節暦)、
等をつけた。そしてこの報告書が、現在島内で販売されている「ヤマナ・カーラ・スナ・ピトゥ
-西表島エコツーリズムガイドブック」の下地となったのである。

3. ガイドブックづくり(1993年~1994年)

(1) 作成に至るまで

このエコツーリズム資源調査を始める時、調査者に課された一つの命題があった。それは、島に成果を残す方法を編み出すことである。先にもふれたように、西表島には過去から現在まで数多くの研究者が訪れ、様々な調査が行われてきている。島民はその都度協力を行ってきたが、研究者はえてして成果を持ち帰って自分の地元で発表するだけで、島には何も残さないことが多かった。それが蓄積されて、島民の中にヤマト不信感が醸成されていたのである。

最終目標にシマおこしをおき、島にエコツーリズムを根付かせようとしている調査ではあったが、結局のところ成果は報告書にまとめられ、島にはコトが残されるばかりである。調査の段階で島民に協力を依頼したり、ヒアリングを行っただけでは不十分であろう。そこでひねりだされた案が、調査結果を元にエコツーリズムガイドブックを作ることであった。

これにはきっかけがあった。1992年の夏、岩波書店が「FIRST NATURE WITH KIDS」という自然教育のシリーズ本の企画を立て、そのうちの1冊の本の編集を(株)地球工作所に依頼した。その折に、地球工作所が関わった西表島の調査のことを知った編集者が、エコツーリズムでシリーズ本を作成することを発案、西表島をその1冊にすることを提案したのである。これを受けて、真板と海津が西表島に出向いて、石垣昭子の工房「紅露工房」で集会を持った。そのときは期が熟しておらず岩波案に乗ることはしなかったが、いずれ島民の執筆による本を作ろう、と皆で合意したのである。(尚、岩波書店の企画は、花井と石垣が主筆となり、島在住の写真家でガイドとしても活躍している村田行の写真をふんだんに用いた「南の島を旅する」というタイトルの本となり、1995年3月に発行された)

(2) 本づくりの開始

翌年の1993年、真板は西表島エコツーリズムガイドブックの作成に向けての活動を開始し、郵政省のお年玉貯金の助成金を申請する。同年秋に助成金が下りた。この頃から真板らの間では、西表島にエコツーリズム協会を作り、本の管理主体となるとともに本の収益が活動資金になることを夢見ていた。しかし助成金で印刷できるのは、300部のみ限定されている。これでは島の資金源にならない。考えあぐねた末、再発行の形態をとり、自己資金も投入して初版900部を島に提供することにしたのである。

制作陣として、編集を海津が、リライトと編集補佐を金坂留美子、デザインを(株)アートポストの滝口貴美子がそれぞれ担当し、(財)自然環境研究センター(当時)の井関佳子が事務を担当、真板が総責任者となった、シマ発、のガイドブックにするため、執筆陣には全員島民あるいは島と深く関わっている人に限定して起用することを方針とした。

1994年1月、竹盛旅館において第1回編集会を開き、企画説明と執筆依頼を行った。この時に集まったのは竹盛洋一（竹盛旅館主人）、石垣金星、伊谷玄、阪口法明、佐竹潔（当時西表国立公園野生生物管理官）、金城清（大原住民）、制作陣全員である。本の構成と趣旨を説明し、各人に執筆依頼と写真提供の依頼を行った。

それからの4ヵ月間、執筆陣と制作陣の間で、昼夜を問わずパソコン通信、ファックス、郵送、人が運ぶなど様々な手段を使って頻繁に原稿のやりとりが繰り返され、制作陣の間でも侃々諤々の日々が続き、5月24日、「ヤマナ・カーラ・スナ・ピトウ-西表島エコツーリズムガイドブック」は西表島に届いたのである。

できあがってみると、本の制作に関わった協力者は、制作陣を除いて延べ40人以上に上った。上記石垣、伊谷、阪口、佐竹のほか、石垣昭子、安溪遊地、横須賀市博物館の大場信義らが執筆、写真は民宿星砂荘の大浜孫慶、在東京の自然観察指導員・小野紀之、村田行、（財）海中公園センターらが提供、その他多くの地元住民や研究者による有形・無形の協力を得てこの本はできあがっている。

尚、この「ヤマナ・カーラ・スナ・ピトウ」というタイトルは、祖納の言葉で「山・川・海・人」。石垣にタイトルの現地語案を聞いた際に出てきた言葉である。エコツーリズムを現すのにふさわしい言葉として採用したものである。

4. 本の完成と西表島エコツーリズム協会準備会発足（1994年5月）

この「ヤマナ・カーラ・スナ・ピトウ」の作成段階から、竹盛、伊谷、石垣、阪口らと制作陣の間では、西表島におけるエコツーリズムの必要性と展望について、時折話し合ってきた。そして、本が完成した際には「西表島エコツーリズム協会」を発足させよう、と話が収斂していったのである。そして、当面は本の販売の受け皿を兼ね、当面は竹盛旅館の竹盛洋一を事務局として連絡先にする、ということに落ちついた。竹盛旅館を連絡先にした理由は、竹盛がエコツーリズムに関心をもっていたことと、当時竹盛が、Marine Lodge アトクのオーナー・河合正憲とともに竹富町観光協会の青年部の副部長を務めていたことである。

そして、兎にも角にも1994年5月24日。刷り上がったばかりの「ヤマナ・カーラ・スナ・ピトウ」が島に届き、大原公民館に、浦内川観光の平良彰健、民宿池田屋の池田守、Marine Lodge アトクの河合正憲、レストランたかな店長、伊谷玄、阪口法明ら、エコツーリズムに関心を持つ15名ほどの島民が集まった。彼らのうちの多くは、その後も継続して協会のコア・メンバーとして参加を続けている。このメンバーの一人で、当時竹富町観光協会青年部長でもあった平良は、このときの挨拶でこう語っている。「自分は船で人を運ぶのが仕事。おそらくマス・ツーリズムに属する仕事だとは思いますが、できるだけ多くの人に西表島の良さをもっと知ってもらいたいと思っている。そのためエコツーリズム協会に参加することにした。」

制作責任者の真板、宮川浩（財）自然環境研究センター研究員）、西表島野生生物保護センターの展示設計者であるP-PLANの上田道秋、海津らが本の配布を行い、島での本の販売方法について検討した。本を一冊2500円とし、500円を販売者に残し、残りを協会が回収すること、本は島の中でのみ販売すること、東部は竹盛、西部は河合が在庫管理を担当することが決まった（現在は西部担当は平良）。

続いて竹盛を司会に、「西表島エコツーリズム協会準備会」の第1回会合が開かれたのである。本の完成と同時の準備会のスタートであった。まず真板がエコツーリズムとは何か、なぜ西表島でエコツーリズムなのか、についての説明を行い、西表島におけるエコツーリズムの展望を語り、討議に移った。そこでは観光業を営む各自がエコツーリズムをよく理解する必要があること、人材リストを作成しエコツーリズムを展開するために必要なガイドを養成すること、そして現在の事務局長である伊谷からは、しばらく準備会の形で時

折会をもち、島をもっとよく知るための勉強会を続けていくことが提案された。そして、今後正式な協会発足に向けて準備会活動を続けていくことで全員が一致したのである。

5. 準備会の活動(1994年~1996年)

(1) メンバー間の意識共有化期間(1994年)

しかし、本の制作に関わった人達以外にとって、「エコツーリズム」とは全く耳慣れない言葉である。真板や伊谷が語るイメージはおぼろげにわかるものの、実際に自分たちがそれとどのような関わりがあるのかが、まったく見えない、というのが本当のところであった。また伊谷達にしても、西表島でどのようにこれを進めていけば良いのか、各自ばらばらに思いを抱いていた。第2回の集まりが1994年6月にもたれたが、この時にも初回と同じ結論を確認する作業で終わり、具体的なアクションプログラムには至らなかった。

竹盛が準備会の責任者であったが、竹盛にしても進む先が見えていたわけではない。とりあえず伊谷が提案した勉強会の継続と、協会の形態を作るためにも規約、定款などを作る作業に着手することにしたが、活動方針が定まっていなければ規約は作れない。そもそもの仕掛人である真板らが参加すれば何となく方向性が見える気がするが、いざ自分達でまとめようとすると舵取りが定まらない。模索の期間が始まった。

第3回の集まりとなった11月には、真板・海津ら東京側が、エコツーリズムについてのイメージアップのため、作成資料を用いて説明した。続いて熱のこもった議論が行われ、協会の設立方法について話し合ったが、この議論を通じて、皆がこだわっている問題点が一つ明らかになった。それは、西表島エコツーリズム協会と観光協会のスタンスの取り方である。端的に言えば町とのつながりをどうするか、ということであった。観光協会の傘下で活動するならば、町からの援助を期待できるが、代わりに活動基盤を竹富町内の島全体に広げなければならない。では観光協会と切り離すとすると、現在コア・メンバーがほとんど観光協会の幹部と重複しているため、彼らにとっては似て非なる新たな作業が増えることになり、線引きが難しい。だが将来のことを考えるならば、いきなり竹富町全域を背負い込むよりも、まず西表島を基盤に独自のエコツーリズム協会を作り、成功させてから、八重山全体に波及させるのが良いのではないか、という考え方に徐々に集約されていった。しかし結論とはならず、次回以降に検討を続けることになった。

この頃のエコツーリズム協会準備会のメンバーは、竹盛、平良、河合、中神明(L.B.カヤックスステーション。シーカヤックガイド)、伊谷、阪口、石垣、落合・梅田(やまねこタクシー)、川満洋一(民宿「バフ」経営)らである。協会の初代代表となった中神はこの頃からの参加であるが、自らシーカヤックガイドをしており、エコツーリズムの意味を体験的に理解していたこともあって、以後、会の機動力の役割を果たす。

(2) 島外からの追い風(1994年夏~1995年夏)

準備会が産みの苦しみを続ける間にも、島の外からは、追い風が吹き続ける。

1) 環境庁エコツーリズム推進基盤調査によるモデルツアーの実施

環境庁は、先に行った西表島でのエコツーリズム・ケーススタディ調査を「エコツーリズム推進方策検討調査」として継続させ、委員会を設けて実現方策の検討を重ねていた。そして、1994年7月には、委員会のメンバーがモデルツアーのために西表島にやってきた。(財)国立公園協会理事

長の日下部甲太郎、(社)日本旅行業協会事務局長の桜田薫、(財)キープ協会環境教育部長の川嶋正、(財)日本自然保護協会海外事業部長の吉田正人、エコツーリズム研究者で当時立教大学講師だったローリー・ルーベック、環境庁自然ふれあい推進室の坂本、そして真板、宮川、海津の総勢9名である。

このツアーでは、エコツーリズム協会準備会にとってはプログラム運営の予行演習をし、外部専門家による評価をうけるチャンスである。準備会のスタッフはプログラム作りとガイドを引き受けた。委員会一行は、竹盛旅館と民宿星砂荘に宿泊し、村田行、石垣金星、中神明、伊谷玄、チームうなりぎきのガイドによって、3泊4日のツアーを体験した。最終日の夜には準備会のメンバーを交えた委員会が行われ、委員からの講評とアドバイスを受け、懇親会を行った。委員からは、西表島の資源はエコツーリズムを行うのに最もふさわしい誇るべきものであること、ガイドスタッフは接客の訓練が必要であるが研究者やプロのガイドなど人材が揃っており、ツアー実施に充分応えうること、宿泊施設において西表ならではの料理を出す工夫が必要であること、等が指摘され、準備会スタッフは大いに励まされた。尚、この時の委員は確実に西表中毒にかかり、各人と島との間に新しい絆が生まれ、現在も続いているようである。

2) 環境庁「西表島野生生物保護センター」の建設とエコツーリズムへの協力

もう一つの追い風は、1995年7月にオープンした「西表島野生生物保護センター」である。同センターの基本構想の策定は、先のエコツーリズム資源調査と同時にスタートした。構想作りを担当したのは、資源調査と同じ(財)自然環境研究センターであり、環境庁や地元の研究者らを中心とする委員会を設けて協議を進めつつ施設の機能を検討した。構想書には、同施設が、1)調査研究機能、2)保護増殖機能、3)普及啓発機能、そして4)エコツーリズム支援機能、を持つことが盛り込まれたのである。これらの4つの機能が連動して働くことによって、地域の野生生物の保護活動を進めることができるのである。

そして7月に施設オープンを控えた1995年3月、エコツーリズム協会準備会は、竹富町観光協会として竹富町宛の文書(資料1)を作成し、町長を訪ね、センターの一室を観光協会の活動の場として貸してもらおうよう、環境庁に申し入れてほしい旨を要請した。これに対し町長は、町として環境庁の事務所に申し入れをすることを了承したのである。そこで準備会としても、一方で、環境庁の理解を独自に求めるべく話し合いを進め、かくして観光協会は西表島野生生物保護センターの一室を利用できることになった。

観光協会とエコツーリズム協会の関係は未整理のままではあったが、実質的には観光協会の幹部=エコツーリズム協会準備会のコア・メンバーである。結果的に、エコツーリズム協会が活動のベースを得た形になった。現在、協会の事務局活動がセンターで行われているのはこの経緯による。

1995年7月12日の開所式には、(財)自然環境研究センターの理事長・大島康行と真板が訪れ、島では真板の講演会を用意し、また今後の協会設立に向けての段取りについて話し合いを持った。

3) 試行錯誤の実績づくり(1995年秋~暮)

開所したセンターには、地元の古見集落住民として松本千枝子が、環境庁職員として阪口法明(1994年4月中途採用)が、委託調査員として伊谷玄が入り、計3人でセンターの日々の管理

運営を始めた。伊谷らは、センターで日々観光客と接するとともに、展示の更新を任せられ、改めて観光客に西表島をもっとよく知ってもらうためのしくみの必要性を感じる。

暗中模索状態からなかなか脱出できなかった協会準備会であったが、センターの一室というベース基地を得、ガイドブックも発行年の年末には2刷目を迎えるほど売れ行き好調、外からの追い風も吹き寄せ、徐々に協会設立へのプレッシャーが強くなってきた。そこで、背中を押し出されるようにして実績づくりの試行錯誤を開始した。迷っていてもしかたがない、何でもいいからできることから始めよう、まだ準備会だからやり直しはいくらでもできる。

まず手始めに行ったのが、エコツーリズム協会準備会の「研修」と称したテストツアーである。第1回目は1995年の10月6日にピナイサーラで実施。エコツアーとはどんなものなのか、これを実感してもらおうと中神、伊谷らが企画したものだ。実はこの公開研修の背景には、メンバーの間にわだかまっていた一つの思いがあった。それは、より多くの島民にエコツーリズム協会の活動趣旨を伝えて参加を募るべきであり、早くその機会を作らなければならない、ということである。これまでの準備会の進め方は、最初に音頭をとった人たちがプライベートに人を呼んで集まりを開いてきた、とメンバーは思っている。島で何か事を起こそうとすると、コミュニケーション不足は御法度だ。活動が骨格を持ち始めるまではそれでもいいが、ある時点まできたら島民に存在をアピールし、呼びかけをしたい、と思っていたのである。テストツアーはそのチャンスであった。

続く11月には野生生物保護センターの展示解説ツアーを実施し、PTAを中心に多くの地元の参加者を迎え、2時間30分にわたるインタープリテーションを行った。また、この頃にはセンターが行う活動も活発化し、12月24日には、イリオモテボタルの研究のために毎年冬に島を訪れる横須賀市立博物館の大場信義学芸員がレクチャーを行った。大場自身、地元の優れた自然を守るためにはエコツーリズムの導入が必要である、とことあるごとに主張してきており、ガイドブックにも快く寄稿してくれた人物である。

こうして協会の組織体制は固まっていなかったものの、センターの活動と二人三脚の形で、徐々にプログラムの試行を重ねていった。

さて、環境庁沖縄地区野生生物・国立公園事務所は1995年4月から国安俊夫が所長を務めている。国安は、国立公園の環境保護と有効活用のためには地元で核となる活動組織が育つことが必要であり、その育成を手伝うのは国立公園管理の仕事の一つである、という哲学を持っている。その為西表島エコツーリズム協会に対しても、可能な限り活動をサポートしようと心がけている。野生生物保護センターの一室をエコツーリズム協会の活動事務局として使うことはもちろん、センター事務室内にエコツーリズム協会事務局が使用できる電話回線を引く計画も具体化した。山本剛瑛の時代に提起されたシマお越しの運動が、国安の代になってようやく、一つの果実を生んだ、ということもできようか。

(3) 協会設立への本格的な活動と会員募集の開始(1995年暮れ~1996年4月)

1995年最後のミーティングとなった12月23日。この日の議論で、いよいよ協会設立に向けての具体的な段取りが開始された。まず協会の設立時期を1996年4月に定め、正式な協会として設立総会を開くことに決めたのである。それに向け、伊谷、松本が中心となって、1996年3月を目標に協会の主意書を作るようになった。また協会は竹富町観光協会青年部から切り離し、独立した存在として位置づけることとした。さらに事業内容を明確化し、会員を公募することにしたのである。協会設立への段取り

が一挙に形を持ち始めた。

実際には、4月の予定は書類の準備等に時間を要して1ヶ月延期され、今日5月14日となったが、この間にも外からの応援は続いた。

まず1996年2月初旬には、アメリカのPartners in Parksのサラ・ビショップさんが西表島を訪れ、2泊3日のツアーを楽しみ島民にエールを送った。また、3月11日から15日まで、オーストラリアのニュー・サウス・ウェールズ州国立公園及び野生生物管理官のアラン・ジェフリー氏が島を訪れた。氏はニュー・サウス・ウェールズに異動する前はクイーンズランド州で世界遺産地域の管理とホエールウォッチングの管理を行っており、エコツーリズムについてもよく知っている人物である。環境庁沖縄地区野生生物・国立公園事務所は、西表島エコツーリズム協会（この時には「準備会」はつけなかった）との共催で、3月14日夜7時30分から千立公民館にて「エコツーリズム講演会」を実施した。アラン・ジェフリー氏は「オーストラリアにおけるエコツーリズムの運営」と題する講演を行い、エコツーリズム先進地でもあるオーストラリアでのエコツーリズム運営の実態と問題点について、多くのスライドを交えて島民に語りかけた。また氏はこの講演のために、渡日前にオーストラリアエコツーリズム協会の代表に面会してきており、彼女からの応援とネットワークの誘いのメッセージを島民に届けてくれたのである。

この講演会には総勢80名前後の聴衆が参加した。準備会はこの機会を利用して、エコツーリズムの説明資料を配布し、中神代表がこれらの説明を行うとともに、会員募集を開始したのである。

(4) TAKE OFF! 協会の設立

こうして総会を持つばかりにお膳立てがすべて整って、最後までスタッフが頭を悩ませたのが、趣意書である。活動内容は決まっていたが、より多くの人に理解してもらう為の趣意書づくりは、困難な作業であった。伊谷が作業を担当していたが、日常のセンター管理の仕事の合間をみて続ける、という制約もあった。先進事例がないため参考資料もなく、自分たちの言葉で一から作った。その結果できあがった趣意書は本資料11頁の通りである。

設立総会を1週間後に控えた5月7日、伊谷、竹盛、中神らは趣意書を持って竹富町の友利町長を訪ね、エコツーリズム協会設立のあいさつを行った。町からの協力の確約は得られなかったが、好意的な感触を受け取った。また5月10日は竹富町観光協会にもあいさつをし、協会の趣旨説明を行った。行政や観光協会との良い関係づくりは、協会を運営していく上でぜひとも必要なことであり、今後の課題として受け止めている。

総会は5月14日夜8時から、西表島野生生物保護センターのAVルームで行われる。

以上が、「西表島エコツーリズム協会」設立の発端から前夜までの経緯である。

*関係者の敬称は省略いたしました。

(1996.5.10 文責:海津ゆりえ)

趣 意 書

西表島は、ヤマネコの棲む秘境の島として、日本全国に知られています。そして、四季折々のすばらしい自然や文化が数多くあります。それらは、まだ人に知られることなく眠っています。私たちは、その一つ一つを掘り起こし、島を訪れる人たちに紹介したいと考えています。

一方、私たちには、西表島という世界に誇る財産を護り、次の世代へと継承していく義務があります。自然や文化は人が訪れることによって、簡単に破壊される脆いものです。日本の観光地では、人間にとっての快適性や利便性を優先した観光を追求したために、多くの自然や文化が失われてきました。

このように観光と自然保護は、相反するものと考えられてきました。今、世界的にこの二つを融合させ、両立させようという動きが始まっています。自然や文化を傷めることなく持続させていくことを活動の最低条件とする旅行形態—エコツーリズムの模索が始まっているのです。

エコツーリズムは、地域の自然と文化の保護とより深い理解を求めるために、少人数を単位とした長期滞在を原則とします。野外では、自然解説指導員（インタープリター）による解説と指導により、野生生物との出会いや自然教育の場を提供していきます。生物にあわせた観察を行うため、夜間や早朝の野外活動などもプログラムの中に盛り込まれます。また、滞在は、地域の方とのふれあいの場であることから、既存の民宿や旅館を活用します。宿の主人との語らいの中から、直接地域の生活文化と触れあう機会を持ちます。そして、このような旅行を体験した人は、再び西表島を訪れてくれることでしょう。

よって、私たちは、ここに西表島エコツーリズム協会を設立し、西表島におけるエコツーリズムの確立を図ることにしました。関係各位の御理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

西表島エコツーリズム協会準備委員会

委員長 中神 明 